



Q. なぜ地面に落ちているヒナをよく見かけられるのですか

A 巣立ちしたばかりのヒナはうまく飛べません。だから、枝から枝へ移るときなどに、地面に降りてしまうことがあるのです。

Q. ヒナを見つけたとき、どうしたらよいのでしょうか？

A 近くに姿が見えなくても、親鳥は必ずヒナのもとへ戻って世話をします。人がヒナのそばにいと、かえって親鳥はヒナに近寄れません。そのままにしてそっと離れましょう。

Q. ネコが近くにいて心配ですが……？

A 近くの木の枝先など、ネコが近寄れない所にとまらせておきましょう。

Q. 人が野鳥のヒナを育てることはできないのでしょうか？

A 私たちはヒナに飛び方や、何が自分にとって危険なのかを教えられません。自然の中で自立していけるように育てるとするのはとても難しいことなのです。また、許可なく野鳥を飼うことは法律で禁止されています。



## なぜヒナを拾っちゃいけないの?

### <まずは、鳥と自然界についての正しい知識を得る必要があります>

野生とは、厳しい世界です。生き延びて当たり前という人間の世界とはまったく違い、明日生きていく保証は何もないのです。野生の小鳥の平均寿命についてはデータが少ないのですが、およそ1年半前後と考えられています。一冬を生き延びたものは経験を積み学習をし、数年あるいは10年以上も生存する可能性もありますが、その割合はおそらくヒナの段階からすると1割あるかないかという程度でしょう。

### <自然界の厳しさについて>

自然界での命の原則は、他の生物の食物となることであり、生き延びるものはほんのわずかです。食べられる側は食べる側よりも数が多く、同時に子沢山という原則があり、さまざまな生物種が共存しています。虫や魚の卵の数を想像してみてください。小鳥も猛禽類や獣に食べられたり、ヒナや弱ったものがカラスのような雑食性の鳥に食べられたりする一方で、卵をたくさんうんだり、春から夏の短期間に子育てを繰り返したりして対応しています。もし、卵すべてが親になったとしたら、増えすぎによって食物やすみかが不足する事態となるでしょう。その種の食物となる生物を食べつくしてしまえば、その種もまた存続できなくなってしまうかもしれません。そうならないのは、厳しい野生の世界では生き延びた一部が子孫を残していくという、生態系のバランスが保たれているからと考えられます。そうは言っても、目の前のヒナや傷ついた野生生物を助けたいという優しい気持ちに対してほうっておけと言っているわけではありません。助けたいとすれば、助けるべき対象かどうかという判断と、どのようにしたら助けられるかという知識が必要になります。

### <ヒナを育てるのが難しいワケ>

ヒナを育てるのがどうして大変か、というときと量の動物質の食物が必要であったり、栄養が偏ってしまうと障害が現れたり、ヒナがうまく野生の生活に適応できるような学習をさせられなかったり、といったことがあります。たとえば、スズメでは1回の繁殖で4200回もヒナに餌を運んだという例が報告されていますし、人がいつまでも餌を与えていればヒナは独立しようとしなくても知られています。

### <法律や行政の対応>

善意による保護も含め、野鳥の捕獲・飼育は「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」いわゆる「鳥獣保護法」によって禁じられています。したがって、保護飼育する場合にも許可が必要になります。県の自然保護課に相談し指示を仰いでください。

「ヒナを拾わないで!!」キャンペーン (財)日本鳥類保護連盟、(財)日本野鳥の会 後援/環境省